

オリンピック・パラリンピックをテーマにした国際理解教育

— CLIL による英語授業実践 —

坂本 ひとみ・滝沢 麻由美

要 旨

2020年夏の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、日本の教育も動き出した。東京都教育委員会が、都内全公立校において、学習内容や活動にオリンピック・パラリンピックを関連づけながら、学習指導要領の目標達成を目指すためのカリキュラムを提示したのは2016年であり、2017年に公示された新学習指導要領では、外国語活動の開始が小学校3年生に引き下げられ、高学年の外国語活動は教科となることが示された。これは子どもたちの新たな学びの契機ともなりうるが、多忙を極める教育現場にとっては、負担に感じている教員が多数存在することも確かである。筆者二名が所属する「小学校テーマ別英語教育研究会」(ESTEEM)では、国際理解教育の普遍的なテーマとしてのオリンピック・パラリンピックを小学校の英語活動で扱う実践と研究を進めてきた。これらはすべて、CLIL(内容言語統合型学習)によって指導案が作られているが、それは国際理解教育で育成する力、新学習指導要領がめざしている3つの柱にも沿っていることもこの論考で示した。全国の小学校の英語教育、そしてオリンピック・パラリンピック教育に少しでも貢献することができるなら幸いである。

I. はじめに

1964年の東京オリンピック開催時、東洋学園大学の前身である東洋女子短期大学の学長であった愛知揆一氏は、文部大臣としてオリンピック組織委員会の理事を務めた。それにより、本学には聖火リレーに使われたトーチや五輪旗が保存されており、2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けても学生たちをボランティアとして参加させるべく、委員会を立ち上げてその教育に取り組んでいる。2018年には、本学の車いすの学生を中心に、パラリンピック競技である「ボッチャ」のサークルも活動を開始した。また、本学と東京オリンピック・パラリンピックの関わりを示すコーナーにおいて、学生ボランティア・スタッフが学園祭やオープン・キャンパスの来場者に説明をしたのだが、発表の機会を重ねる毎に彼らのコミュニケーション力が伸びていることも明らかであった。

東京都は2020年の夏季大会開催都市として、オリンピック・パラリンピック教育に力を入れ、その歴史や意義などについて学べる学習読本と、*Welcome to Tokyo!*という外国人おもてなしのための英語教材を作成、都内の全公立の小・中・高等学校に配布し、年間35時間分の他教科連携授業を推進している(東京都教育委員会 2016)。

この論考の筆者である滝沢・坂本は、2012年のロンドン開催のオリンピック・パラリンピックの頃から、それぞれの英語授業においてオリンピック・パラリンピックを取り上げ、CLIL(Content and

Language Integrated Learning：内容言語統合型学習）授業案を作成し、いくつかの学校において実践を積み重ねてきた。2020年の東京大会を推進するという目的のためだけではなく、国際理解教育のテーマとして、オリンピック・パラリンピックは普遍的に有意義なものであるという考えのもと、実践と研究を継続しており、本稿は、現時点までの実践を通して得られたオリンピック・パラリンピック教育のおもな成果をまとめたものである。

II. 国際理解教育とオリンピック・パラリンピック教育

滝沢は、町田淳子氏と共同で、2017年度の一般財団法人日本児童教育振興財団の研究助成を得て、都内外8校の実践研究協力（23クラス、計85時間分）を通し、小学生を対象としたオリンピック・パラリンピックをテーマにしたCLIL授業案を、国際理解教育の5つの分野（平和、人権、環境、異文化コミュニケーション、地域・国別研究）に沿ってまとめた研究報告書（2018）と教材本（2019）を出版し、精力的にこのテーマに取り組んでいる。

町田・滝沢・坂本は、同じ「小学校テーマ別英語教育研究会」（Elementary School Thematic English Education Movement：略称ESTEEM）のメンバーとして、ともに実践と研究を積み重ねてきた。私たちが目指していることは、子どもたちが、2020年が過ぎれば忘れてしまうような一過性のスポーツ・イベントとしてオリンピック・パラリンピックをとらえるのではなく、オリンピック憲章に謳われているオリンピズム、すなわち「スポーツを通して、心身の調和のとれた人間を育成し、平和な社会の創造に役立つ恒久的な営み」について深く理解するということであり、いつ、どこでオリンピック・パラリンピックの大会が開かれようと、この論考で追求した教育方法や教材は国際理解教育としての普遍的な有用性を持つことを意図している。

II-1 国際理解教育の定義と新学習指導要領

町田（2018）は国際理解教育と新学習指導要領について以下のように説明している。

ESTEEMでは、教材開発の際に基盤としている国際理解教育の考え方について、下記の定義を取り入れている。

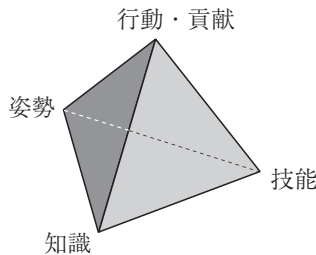
「多様な文化が存在し、人間も他の生き物も相互依存の関係で生きる世界で、地球市民としての責任を果たし、同時に自己の可能性を生かして、豊かな人生を送るのに必要な生きる力（姿勢／知識／技能）を育てる学びであり、教育である。」

ーワールド・スタディーズによる定義をGITC¹が更に発展させたもの（2000）ー

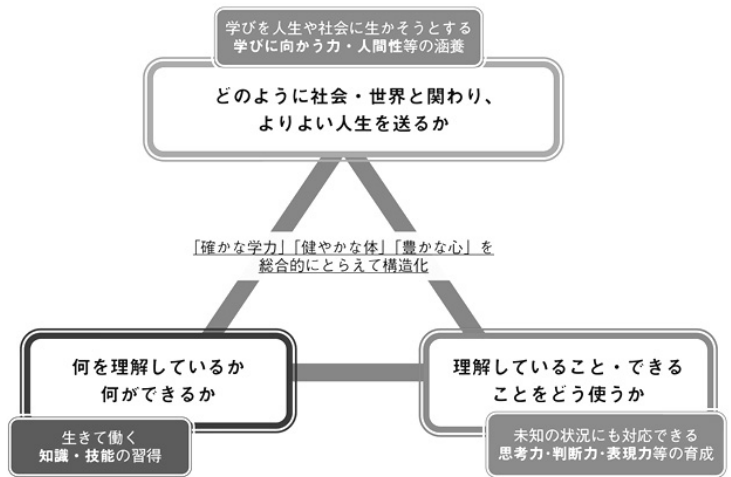
この定義の根底にある概念は、国際理解教育に関するユネスコ勧告²で明示された次の指導原則（ユネスコ憲章の理念）によるものであり、それは「すべての段階及び形態の教育に国際的側面及び、世界的視点をもたせること」である。

さらに、図①(Machida, 2013) のように「姿勢」「知識」「技能」の3つの資質を育む学びを積み重ねることによって、「行動・貢献」できる地球市民を育てることを目指している。

この考え方は、文部科学省が2017年3月に発表した「新学習指導要領の3つの柱（①知識・技能 ②思考力・判断力・表現力等 ③学びに向かう力・人間性等）」として示した図②に通じ、新学習指導要領の理念の実現にも結びつくものと言える。



図① (Machida, 2013)



(出所) 文部科学省ホームページ

図②

II-2 国際理解教育と英語教育の捉え方

町田・滝沢(2018)によれば、英語教育をどのように捉えるかという点において、II.1で述べた国際理解教育のあり方に沿えば、外国語教育の目的も、自ずと下記のユネスコの外国語教育に関する勧告³に表されるものとなる。

現代外国語教育はそれ自体が目的ではなく、その文化的および人間的側面によって、学習者の知性と人格を鍛え、よりよい国際理解と市民間の平和で友好的な協力・協働関係の樹立に貢献す

べきである。

ESTEEMでは、こうした定義や勧告に深く共感し、これに応えるために英語教育研究を進めてきている。その理念は、このオリンピック・パラリンピックの内容で学ぶ英語教材の目標にも盛り込まれるべきであると考えられる。

II-3 オリンピック・パラリンピック教育について

II-3-1 オリンピック・パラリンピック教育の理念とムーブメント

国際オリンピック委員会 (International Olympic Committee: IOC) は、フェアプレーの精神と友情・連帯を大切にしながら平和な社会を築き、人類の調和のとれた進歩を導くことを理念と掲げたオリンピック・ムーブメントを推進している (IOC, 2017: 18-19)。その中で、オリンピックの価値を学ぶ助けとなり、若者の行動に良い影響を与えるために、オリンピックの中核となる3つの価値 (卓越: Excellence, 友情: Friendship, 敬意/尊重: Respect) をもとに、5つのオリンピック教育のテーマ (努力から得られる喜び: Experiencing the Joy of Effort, フェアプレイ: Learning to Play Fair, 他者への敬意: Practicing Respect for Oneself and Others, 卓越性の追求 (向上心): Pursuit of Excellence, 肉体・意志・精神のバランス: Living a Harmonious and Balanced Life of Body, Will and Mind) を定めた「オリンピック価値教育」(Olympic Values Education Program: OVEP) を展開している。そこでは、子どもや若者の人格形成に資する価値に基づいたカリキュラムを広め、さらにオリンピック競技を題材として、地球市民としての責任を果たし、市民リテラシー、すなわち社会参画に必要な知識を身につけるためのスキルや方法を学ばせることを狙いとしているが、これはまさに、今まで述べてきた国際理解教育や学習指導要領の理念にも通じるものであると言えるだろう。

このような目的を達成するため、OVEPの知識に基づく重要なリソースが4つのセクションで説明されている。すなわち、1) オリンピック価値教育の基礎: スポーツに基づくプログラム (The Fundamentals of Olympic Values Education: A Sports-Based Program), 2) OVEP プレイブックを伝える: オリンピック価値教育のための実用ガイド (Delivering OVEP PLAY book: A Practical Guide to Olympic Values Education), 3) アクティビティシート: オリンピック価値教育のための実践ワーク (Activity Sheets: Exercises to Support Olympic Values Education), 4) The Resource Library, である。この最初のセクションでは、オリンピズムの中核となる原則について述べられており、学習者はそれが自分たちの人生や生活にどのように関わっているかを考えるよう促される。続く3つのセクションでは、オリンピック教育のテーマを軸に、オリンピック競技大会の歴史、物語、シンボルを探究する。OVEP学習者は、一連のアクティビティシートを通じて、それぞれ経験と理解を深める機会を得る。教師と学習者はまた、The Resource Libraryに収められたさまざまなリソース (映像、記事、リンク) を活用できる (JOC 2017)。

日本オリンピック委員会 (Japan Olympic Committee: JOC) も、この価値教育についての理解を共有し、その一部を筑波大学及び日本オリンピックアカデミーの監修により、日本オリンピック委員会

が翻訳した日本語版OVEP教材を提供している（東京2020組織委員会，2018）。また，日本独自のさまざまな活動もおこなわれている（JOC，2014：18-20）が，特に子どもたちに関係のあるものとしては，オリンピックと一緒にジョギング等をしてオリンピックとスポーツに親しむ「オリンピックデーラン」，体育の日にやはりオリンピックとともに参加型でおこなわれる「スポーツ祭り」，中学校でオリンピックが出張授業をする「オリンピック教室」，IOCに優秀作品を推薦する絵画／作文コンテスト等が挙げられる。他に，2018年に東京2020組織委員会主導でオリンピック史上初めておこなわれた，小学生による公式マスコット投票は記憶に新しい。

一方，国際パラリンピック委員会（International Paralympic Committee：IPC）では，パラリンピックの4つの価値（勇気：Courage，強い意志：Determination，インスピレーション：Inspiration，公平：Equality）を掲げ，パラリンピックの意義とは，様々な障がいのあるアスリートたちが創意工夫を凝らして限界に挑む姿を通し，多様性を認め，誰もが個性や能力を発揮し活躍できる公正な機会のある共生社会をパラリンピック・ムーブメントとして推進し，具現化することであるとしている（JPC，2012）。パラリンピック教育における教材としては，IPCが開発した公認教材「I'mPOSSIBLE」の日本語版が現在，東京2020組織委員会の公式サイトで紹介，公開されている。これは，教室での座学による「パラリンピックの価値」と，競技を経験する「パラリンピック・スポーツ」という2部から成り，パラリンピアンへの体現するメッセージが込められている。

日本でのオリンピック教育についての研究は，特に筑波大学で以前からおこなわれているが，2016年には東京都教委の教材も監修した真田がオリンピック教育プラットフォーム事務局長として，国際的な解説書「オリンピック教育」を監訳しまとめている。このように，東京2020大会開催を機に，従来からあった各国際委員会によるオリンピック・パラリンピック教育と理念，その教材と実施内容も広く紹介され，より多くの人たちの目に触れられるようになっている。

II-3-2 東京都教育委員会のオリンピック・パラリンピック教育

「オリンピック・パラリンピック教育の目的は，知・徳・体の調和のとれた人間の育成，すなわち全人教育である」。これは，東京都教育委員会が編纂した学習読本に，その基本的考え方として謳われたことばであり，オリンピック憲章の前文に書かれている「オリンピズムの根本原理」を実現するための教育を一言で述べたものだが，これもやはり，前述の国際理解教育の理念と相通じていると言うことができるだろう（町田・滝沢，2018）。東京都教育委員会（2016）は開催都市の教育的取り組みとして，都内全公立校において，学習内容や活動にオリンピック・パラリンピックを関連づけながら，学習指導要領の目標達成を目指すよう年間35時間程度のカリキュラムの導入を実施しており，図③のような「4つのテーマ×4つのアクション」という枠組みを設け，各学校裁量でこの学びのバリエーションを展開するよう求めている。その中で「重点的に育成する5つの資質」として，「ボランティアマインド」「障害者理解」「スポーツ志向」「日本人としての自覚と誇り」「豊かな国際感覚」を挙げ，それを推進する4つのプロジェクト（東京ユースボランティア，スマイルプロジェクト，夢・未来プロジェクト，世界ともだちプロジェクト）を実施している。



(出所)東京都教育委員会ホームページ

図③

しかし一方で、このようなことが、いま特に2020年の新学習指導要領実施への移行期である多忙な学校現場にとって、なかなか大きな負担にもなり得ることは否めない。これを鑑み、町田・滝沢(2018)では、テーマ学習の特性としての他教科関連だけではなく、この枠組みも授業案作成にあたって取り入れることで、より現場に沿い役立ててもらいたいと考えた。また、オリンピック・パラリンピック教育が東京の子どもたちだけのものにならないよう、地域にも将来にも開かれた普遍的なテーマ学習を作ることを目指した(2019)。

Ⅲ. オリンピック・パラリンピックをテーマにCLILで英語を学ぶ

Ⅲ-1 CLILと新学習指導要領、オリンピック・パラリンピック教育との関連

CLILとは、内容(Content)、言語(Communication)、思考(Cognition)、協学(Community)/国際理解(Culture)で構成される「4つのC」(Coyle et al., 2010: 48-85)を、有機的に結び付けパッケージ化したもので、この「4つのC」の相乗効果(synergy)によって、より効果的な教育が実現されることを目指している(池田, 2011)。今回の授業案はそれを狙いとして、このCLILの枠組みで構成されている。

この学び方は、1990年代からヨーロッパで広まり始め、日本においては2000年代に入ってから、学習者が21世紀型スキルを身につけ、グローバル社会で生き抜く力を獲得するのにふさわしい学び方として認知されてきた。EU統合をめざすヨーロッパの教育の流れの理論の中心を担った一人がバイラムであり、彼はintercultural communicative competence (ICC:「異文化間コミュニケーション能力」)を育成する教育のための三要素として、「姿勢」「知識」「技能」をあげており(1997)、これはⅡ.1.1で述べたESTEEMが推進する学びの理論的根拠となるものである。また、バイラムは、小学校での外国語教育の目標には異文化間コミュニケーション能力の育成を掲げることが望ましいと提言している⁴。

現行の小・中・高等学校等の学習指導要領、そして、2020年度から、まず小学校で施行される新学習指導要領は、グローバル社会で生きていく子どもたちにふさわしい学びを提示したものであり、国

際理解教育, または, ESD (Education for Sustainable Development) の理念に基づいた, 持続可能な社会を形成するための視点が盛り込まれている⁵。

したがって, これまで論じてきた国際理解教育のための英語教育を実現するにあたり, CLIL という枠組みで学習をデザインしていくことは適切なことであると ESTEEM では考え, 今回のオリンピック・パラリンピックをテーマとした英語授業でも, すべて CLIL という学びのシステム・モデルにしたがって指導案を作成した。

2020 年度から施行される新学習指導要領では, 「育成を目指す資質・能力の三つの柱」として, 「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力, 人間性等」があるが, 町田・滝沢 (2018a) の実践研究に含まれる本稿の授業案においては, 二人と坂本が共に実践・執筆協力した別の CLIL 実践研究授業案本 (笹島・山野 2019 in press) で用いられた, この三つの柱に CLIL の 4Cs を 'Content & Communication', 'Cognition', 'Community/Culture' として, それぞれが対応すると考える目標を参考に, より明確に組み込み設定している。

また, CLIL の大きな特徴の 1 つとして他教科連携・教科横断的な学びがあり, 教科科目で学習する内容を外国語学習で扱うが, オリンピック・パラリンピック教育で取り扱うことができる教科内容も体育だけでなく, 前述の 4 つのテーマから派生し, 道徳, 社会, 理科, 国語, 図工, 音楽, 算数, 家庭科等, 同じように多岐に渡っている点で, CLIL 授業案として非常に適していると言えるだろう。このような指導法は, 多重知能理論 (Multiple Intelligences Theory) (Gardner, 1983) を背景に, 動機付け, 概念の発達, コミュニケーション, 教材や指導の効率性や, それぞれの子どもの各知能における得意性や知的発達段階に適していたり (二五 2016), その教科内容に使われる重要なキーワードを外国語でも扱うことから, 内容と言語に対して気づきと理解をより深める (Bali et al. 2015) とされ, このような関連性も基本とする今回のアプローチには, 一定の効果が期待される。

IV. 実践授業・結果・考察

IV-1 福島の公立小学校における実践 (坂本)

IV-1-1 1-3 年生合同授業

2011 年の東日本大震災時に起きた福島第一原子力発電の事故による放射能汚染の影響は今だに県内外の人々に不安を与え続けている。福島から他県の小学校へ転校した子どもが放射能を理由にいじめにあうという事態も起きている。坂本・滝沢は, 福島の子どもたちが自分たち, そして福島の地元文化に誇りを持ち, 地球市民として環境問題やエネルギーの未来について英語を通して学び, 同じく英語授業において環境のことを学んでいるトルコの子どもたちと学びの協働をするというプロジェクトを, 2014 年 1 月以来, 実践してきた (坂本・滝沢 2016)。

坂本ゼミでは, 学生たちの児童英語教育実習として福島の公立小学校を訪問し, 国際理解教育の内容をテーマとした外国語活動を行い, 卒業研究にもつなげてきた。2020 年の東京五輪は, 東日本大震災の際に支援をしてくれた国々への感謝の気持ちを表し, 復興した東北の姿をアピールするという狙いも持っている。そうした理由により, 五輪の聖火トーチリレーは福島からスタートすることになり,

最初の競技も福島県の営あづま球場で行われる予定となっている。

2017年10月に実施した外国語活動は、福島県須賀川市立白方小学校においてであり、この学校は福島県で最初にユネスコスクールとして認定された学校である。日ごろから環境教育や国際交流を熱心に行い、ESD (Education for Sustainable Development) を全学年のカリキュラムの基盤としている。一学年に一学級のみという学校規模であり、子どもたちは自然に囲まれた環境でのびのびと学んでいる。

実習日、3校時を使って、1年から3年生の合同クラス51名に本学の学生12名と坂本が入り、「オリンピック・パラリンピックについて学んでみよう」という外国語活動を行った。この授業の新学習指導要領の3つの柱、CLILの4つのCに沿った目標は以下の通り。

1. [知識・技能] (Content・Communication)

- オリンピック・パラリンピックは世界各国の人々が集う平和の祭典であることや障害者の人権について聞いて理解することができる。
- オリンピックの五輪の色、五大大陸の名前、各大陸にある国名、スポーツの名前を英語で言える。
Asia, Europe, Africa, America, Australia / Japan, Ireland, Kenya, Brazil, Australia / swimming, soccer, basketball, volleyball, judo
- 平和にかかわるキーワードの中の一つを選んで手形の葉っぱカードに書くことができる。peace, love, friends, family, happy, smile 等

2. [思考力・判断力・表現力等] (Cognition)

- オリンピック・パラリンピックについてすでに持っていた知識を判断材料として自分の考えたことを表現したり、平和にかかわるキーワードの中から自分がもっとも大事だと思うものを選んだりする。
- ブラインドボウリングを体験することにより、視覚障害者の気持ちを理解しようとする。

3. [学びに向かう力・人間性等] (Community/Culture)

- 1年生から3年生の混合グループによる学び合いの時間に積極的に参加し、助け合いながら課題に取り組もうとする。
- トルコの子どもたちのことを思い浮かべながらポスターを作る活動に意欲的にかかわろうとする。

〈指導手順〉

- 1) 五輪の色の輪は世界の5つの大陸を表していることを理解し、五輪の色、大陸名、各大陸にある国名を英語で言ってみる。
- 2) ABCクイズにグループでカードを上げて答えながらオリンピック・パラリンピックについての知識を深める。
- 3) 五人組になって腕を組んで五輪を体現しながら、これが平和のシンボルであることを理解する。
- 4) ジェスチャーゲームを使って、スポーツ名を英語で言ってみる。
- 5) ブラインドサッカーのビデオを見て、パラリンピックに関心を持つ。

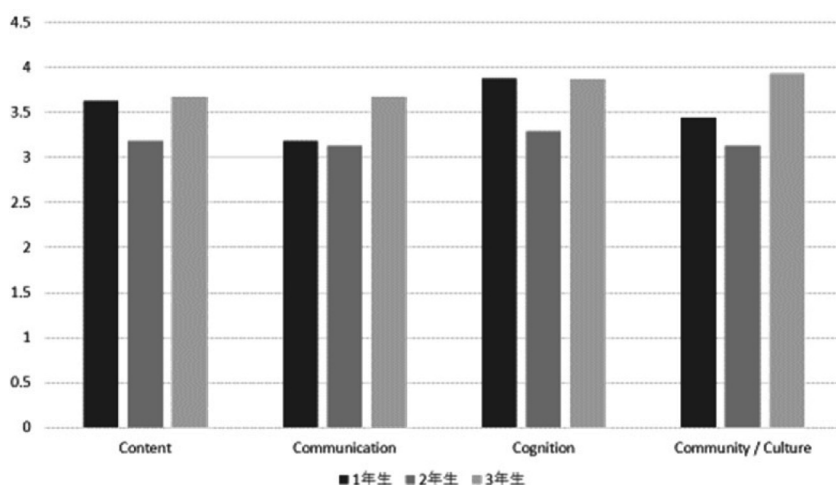
- 6) ブラインドボウリングをやってみて、障害のある人の気持ちを理解しようとする。
- 7) 平和にかかわる6つのキーワードを学び、自分をもっとも大事だと思う言葉を手形の葉っぱカードに書く。
- 8) みなで協力してピースツリーポスターを作成し、トルコに送る。
- 9) 各クラスに戻り、振り返りシートに記入。

〈授業観察〉

- 1～3年生が対象ということで、クイズやゲーム、体を動かす活動、手先を使う活動などを入れたことで、児童が積極的に授業に取り組んだ。
- 自分の手形を切り抜いてみなでピースツリーのポスターを作る活動にはグループで協力しながら取り組んでいた。

〈質問紙調査の結果〉

児童の振り返りシートで各4Csの問いについて、「とてもそう思う」(4点)「そう思う」(3点)「あまりそう思わない」(2点)「そう思わない」(1点)の平均点を出し、以下のようなグラフにまとめた。



グラフ① 学年別の4Csの観点による自己評価

どの項目においても2年生の結果が低めであるが、学年ごとのクラスカルチャーが影響していると推測される。3年生のCommunity/Cultureが最も高い平均点が出たが、この項目についての記述で、トルコに送るピースツリーを、自分たちの手形をもとにした葉っぱカードを貼り合わせてみなで作ったことに言及していた児童が15人中9人と60%を占め、平和のメッセージを6つの中から自分で選んで書いたことなどが楽しかったという自由記述も多く見られ、「覚えている英語を書いてください」というCommunicationに関する問いでは“smile/peace/friends”などと英語で正しく書いている児童が多数いたことは注目に値する。1時間授業にしては内容が盛り込まれすぎているという反省はあるが、「五輪にしみがあることがわかった」などの記述も2年生から見られ、授業の目標は達成できた

と考えられる。

Ⅳ-1-2 4-6年生合同授業

実習日の4校時を使って、坂本ゼミの4年生、下村義和氏がメインティーチャーを務めて「前回のオリンピック・パラリンピック開催国であるブラジルについて学ぼう！」という外国語活動を4年生から6年生の合同クラス49名を対象に実施した。

この授業の新学習指導要領の3つの柱、CLILの4つのCに沿った目標は以下の通り。

1. [知識・技能] (Content・Communication) :

- 前回のオリンピック・パラリンピック開催国であるブラジルについて聞いて理解することができる
- 特に環境問題にフォーカスをし、アマゾン熱帯雨林で起きている環境破壊について聞いて理解することができる。
- ブラジルの音楽であるサンバを全員で合奏する。
- ブラジルに関するものを英語で表現する。

capital/the Amazon River/the Amazon Rainforest/football/samba

- 環境を守るために自分ができることを英語で表現する。

We can～. do research/talk about the problem/send messages/
recycle papers/plant trees

2. [思考力・判断力・表現力等] (Cognition) :

- ブラジルという異文化への関心を高め、環境への意識を高める
- 地球環境をよくするために自分にもできることを考える。

3. [学びに向かう力・人間性等] (Community/Culture) :

- 4年生から6年生の混合グループによる学び合いの時間に積極的に参加し、グループで協力しながら、ブラジルクイズに答える。

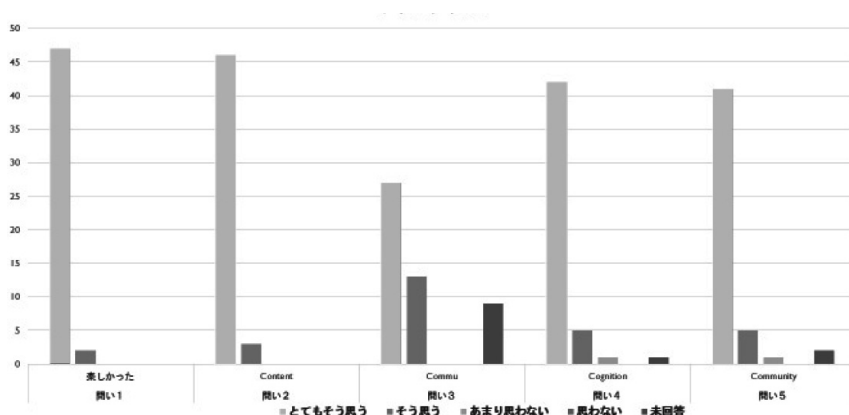
〈指導手順〉

- 1) 授業者(下村)が、ブラジルに3年間住んでいたことを話し、家族と撮ったイグアスの滝の写真を見せ、児童がブラジルについて知っていることを引き出す
- 2) ブラジルクイズを英語を使いながら行い、グループごとに答えてもらう。
- 3) アマゾン熱帯雨林で起きている環境破壊についてもクイズ形式で尋ねる。
- 4) ワークシートを用いて、地球環境をよくするために自分ができると思うことを英語を用いて考えてみる。
- 5) ブラジルの子どもたちがサンバの合奏をしているビデオを見せたあと、児童全員で合奏ができるよう練習し、実演。
- 6) 児童は振り返りシートに記入する。

〈授業観察〉

- メインティーチャーが本学の4年生であり、彼が実際に3年間も住んでいた国を紹介したことから、4-6年生の児童が授業内容に一層関心を持つことにつながった。
- ブラジルクイズにはグループ単位でよく参加していた。
- 最後の合奏は、この学校がふだんから合奏に熱心であるため、大変盛り上がった。

〈質問紙調査の結果〉



グラフ② 4-6年生の4Csの観点による自己評価 (N = 49)

問1：今日の授業は楽しかったですか？

問2：ブラジルについていろいろなことがわかりましたか？

問3：今日の授業についての英語を聞いたり、言ったりできましたか？

問4：ブラジルクイズを一生懸命考えたり、日本とのちがいや似ているところがわかりましたか？

問5：みんなで協力したり、ブラジルについてもっと知りたいと思いましたか？

問6の自由記述には以下のような意見が見られた。

- ①ブラジルについてもっと教えてほしいと思った。(Content)
- ②アマゾンの事を楽しく英語で学べたので、アマゾンについてもっと英語で知りたいと思った。(Content/Communication)
- ③色々な英語を知れたと同時に、アマゾン熱帯雨林が年々減っていることを知り、リサイクルに励みたいと思った。(Content/Communication/Cognition)

IV-1-3 考察

福島での2つの授業実践は、CLIL授業の4つのCのうち、Community / Cultureの要素で特にうまくいっていると思われる。1-3年生の混合グループ、4-6年生の混合グループという異学年交流、そして各グループに本学の学生がついており、その学生たちがファシリテーターとなってグループでの学びを深める仕組みとなっている。学生たちのファシリテーションの力が未熟であるため、思考の

高まりはまだ満足なものとはなっていないが、このようなスタイルの学び方が、児童の学習意欲を大いに高めていることは授業観察や担任教員のコメントからも明らかであり、質問紙調査の問1「今日の授業は楽しかったですか?」において、高いポイントが得られていることと関連していると考えられる。

「4-6年生の4Csの観点による自己評価」のグラフで、Communicationの結果が低いのは、授業者がポルトガル語の挨拶なども教えて、男女別の言葉を児童が繰り返したりしたため、英語の目標は少しあいまいになったことが原因だと思われる。

小学校の外国語活動においては、どれだけ多くの英語表現を覚えたかということよりも、その後の英語学習にどれだけ意欲的に向かう態度が育成できるかということの方がより重要性を有するということは、多くの小学校教員と筆者たちが共有する意識である。その点において、この2つの実践は将来への希望が持てる結果を得られたと考える。

IV-2 東京都大田区立小学校での実践（滝沢）—国際協働学習を通して

本実践は、2017年度に東京都大田区立M小学校で、前述の東京都教育委員会のオリンピック・パラリンピック教育のプログラムの1つである「世界ともだちプロジェクト」の一環として、M小学校の学校地域支援本部の活動の1つの「土曜英語教室」において、国際協働学習を推進する世界的なNPO団体であるInternational Education and Resource Network (iEARN: アイアーン)のプロジェクトに参加したものである。

iEARNは1988年、冷戦状態だったアメリカとソ連を危惧し、ニューヨークとモスクワの高校生たちを当時のテクノロジーによって繋いだ交流プロジェクトから始まり、現在は、140ヶ国、30ヶ国語からなる5万人の教育関係者とその生徒たち(K-12: 幼児から高校生まで)200万人のメンバーがいる。そこでは、国連のSDGs(持続可能な開発目標)17項目のうちのどれかに沿う100以上のプロジェクトがあり、ITを使った国際協働学習が展開されている。また、毎年おこなわれる国際会議では、生徒たちが参加するユース・サミットも同時開催され、世界中から集まった参加者たちが直接顔を合わせ、意見交換や文化交流を通して、さらに問題意識を共有したり友情を育んだりしている。滝沢は、2018年7月に米国でおこなわれた国際会議に参加し、本実践を含むTokyo 2020のための国際協働学習についてのポスター発表と、前回のRio 2016の開催国であるブラジルのメンバーとのオリンピックの内容を含んだプロジェクトについて、口頭発表をおこなっている(iEARN USA 2018)。

日本には、iEARNの日本センターの役割を持つ「NPO法人グローバルプロジェクト推進機構ジェイアーン(JEARN)」があり、文部科学省の公式サイトにおいては、1990年代からグローバル教育をおこなってきた団体として紹介されている(文科省 2004)。iEARNのプロジェクトの中には、日本のメンバーがファシリテーターを務めるものもあり、そこでは日本のメンバーがより取り組みやすいと言えるだろう。今回は、その中の「テディベア・プロジェクト」であったが、これはパートナー校同士が、自分たちの代表としてぬいぐるみを1つずつ「留学生」として送り合い、その「留学生」が滞在する様子を通して、お互いの学校生活や文化を紹介し合ったり、追体験するプロジェクトである。

この中で特に清水（2018）は、大学の「グローバル教育研究所」のプロジェクトとして、石川県内の教員にこのプロジェクトを実践するためのサポートをおこなうと同時に、教員養成課程の学生をファシリテーターとして参加させ、日本の学校現場で、このような国際協働学習が根付くような試みを行っている。

本実践では、オーストラリアの小学校の日本語選択クラスがパートナーとなったため、自分たちの母語が相手の学習言語であるという2ヶ国語でのやり取りを前提としたことが、言語面での最も大きな特徴であった。今回、こちらからの「留学生」は、クマの「マーゴ」、交流校からはカンガルーの「オージー」を送り合い、一緒に活動したり、数人の児童の自宅でホームステイをした。

IV-2-1 目的

- 1) 今回の特徴である2ヶ国語でのやり取りを含んだ多様な CLIL 授業案を作成することにより、各活動における児童の反応や気づきにどのような傾向や特徴があるかをみる。
- 2) この国際協働学習プロジェクトを通して、日本の児童が同年代の外国の児童への他者意識を高める。

IV-2-2 方法

- 授業実践期間：2017年5月から3月まで毎月1回の全10回（1回90分）。*1月はなし
- 対象：大田区立M小学校4～6年生の混合グループ20名が、オーストラリアのE校の5,6年生の日本語選択クラス16名と交流（日本人教師）。
- 質問紙調査：①日本の児童が、情意についてと、上記の新学習指導要領の3つの柱とCLILの4Csの観点による質問5項目（4件法）に、自由記述を加えた全6項目から成る振り返りシートに記入する ②同じ観点で授業者（筆者）も記入する。
- 分析方法：山野（2013）や坂本・滝沢（2016）を参考に、上記の問1から問5までの回答選択式項目（4件法）は単純集計し、その授業における傾向を、問6の回答記述式項目は、特徴的ないくつかの記述について考察する。

IV-2-3 単元目標と活動内容

<単元目標>（このプロジェクト全体を通して）

1. [知識・技能]（Content・Communication）
 - 目標言語や、E校の子ども達の英語と日本語を聞いて、だいたい理解できる。
 - 各トピックに関する目標表現でやり取りをしたり、紹介や発表ができる。
 - 目標表現や自分で選んだ語句を一緒に読んだり、ワークシートに書き写すことができる。
2. [思考力・判断力・表現力等]（Cognition）
 - 各トピックの活動で、自分で理由を考えて語句を選んだり、分類したりする。
 - 自分の伝えたいことを作品を通して表現しようとする。

- 他の国や子ども達の様子から、自分たちとの類似点や相違点に気づいたり、意見を持ったりする。

3. [学びに向かう力・人間性等] (Community/Culture)

- 同年代の外国の子ども達の様子を知ったり、一緒に各トピックに興味や関心を持って取り組もうとする。
- 他者意識を持って活動することによって、より友達意識を持とうとする。

<活動内容> : 「トピック」(使用言語) <交流方法>・関連教科と各回の単元目標(前述1.2.3.)

5月～「交流を始めよう！自己紹介& Self-introduction」(お互い日本語と英語の両方で名前を書いた画用紙を持ち、2ヶ国語でおこなう)〈ビデオ〉 社会・国語・総合

1. 交流校やその国がどんなところか知り、自己紹介を書いたり、言うことができる。
(Hello! My name is～. I'm ten. I like ～. Nice to meet you!)
2. 相手国についてのクイズの答えを考えたり、自己紹介で自分を表現しようとする。
3. 積極的にペア練習をしたり、交流校の児童たちの自己紹介に興味や関心を持とうとする。

6月～「校庭遊びを紹介しよう」(2ヶ国語)〈ビデオ〉 体育

1. 交流校の校庭遊びの様子をビデオで見て、自分たちも実演しながら紹介できる。
(This is a climbing pole. I can do it! Do you want to try it?)
2. どのように遊びを紹介するかを考えたり、自分たちとの類似点や相違点に気づく。
3. 進んでグループで協力したり、交流校の遊びの様子に興味・関心を持とうとする。

7月～「Tokyo 2020のマスコットデザインに投票してもらおう」〈画像とコメント〉 社会・図工

1. 東京に関して(都のシンボル、花、木、鳥や名所等)や、前回のリオ2016までの大会マスコットについて知り、自分のデザインを紹介できる。
(This is my mascot design. How do you like it? 等)
2. 東京や日本の特徴を考えながら、自分のマスコットデザインを創作する。
3. 交流校からマスコット投票してもらい、どのようなことに興味を持つのかを知る。

8月～「夏休みの思い出のカラーージュを作り&スピーチと絵日記」(英語)〈ビデオと作品送付〉 図工・国語

1. 夏休みに関する英語を知り、自分の作品紹介で言ったり書いたりできる。
(This is my summer memory. I went to Tokyo Disney Land. I had fun! 等)
交流校からの「オーギーのHomestay Diary」を見る。
2. 自分のカラーージュを工夫して創作する。他の児童の作品をみる。
3. 交流校の冬(季節が逆)休み絵日記をとおして、南半球の様子を知る。

9月～「健康なからだをつくる食生活～September Veg & Fruit」(2ヶ国語)〈ワークシート画像&スピーチビデオと作品送付〉 家庭科・理科

1. 様々な色の野菜や果物を毎日食べることが健康的と知り、それについて言ったり書いたりできる。(This is 'My Rainbow Veg& Fruit'! I like tomatoes. 等)。交流校の「好きなくだものと野菜」のポスター作品を見る

2. 健康に良い食べ方を考えながら、5色の野菜と果物のグループから1つずつ選び、自分の‘Rainbow’を創作する。
3. 交流校の学校プログラムを知り、その昨品を見たり、自分たちも同じテーマに取り組もうとする。自分たちの育てている地元野菜について紹介する。

10月～「もったいないおばあさん（対訳絵本）と‘Mottainai Hunting’をしよう」（2ヶ国語）〈ワークシート画像とスピーチビデオ〉 理科・社会

1. 絵本を2ヶ国語で理解したり、ワングリ・マータイさんについて知る。5Rsの例 (Reduce, Reuse, Recycle, Repair, Refuse) 等を一緒に言ったり書いたりできる。交流校の「もったいない」スピーチを見る。
2. 身近にある「もったいない」ことを集めて、それを5Rsに分類したり、減らすことを考えたりする。
3. マータイさんが日本の「もったいない」を世界に広めようとしたことや、交流校の児童たちの「もったいないこと」についての日本語スピーチビデオを見て、興味・関心を持つようとする。

11月～「ホリディカードを作って送ろう」（2ヶ国語）〈作品送付〉 社会・図工・総合

1. 交流国のホリディの様子を知る。カードにお正月の紹介文が書ける。
(In Japan, we celebrate the New Year. I like to eat rice cakes. 等)
オーギーのお別れスクールツアーをする。
2. 自分のカードのデザインや内容を考え、創作する。
3. 交流校のホリディカードを鑑賞し、気づいたり感想を持ったことを話し合う。

12月～「テディベア・プロジェクト全体の振り返り」（2ヶ国語）〈作品とコメント〉 総合

1. 今までの活動を画像やビデオ、作品、SNS等で振り返り、Thank you messageを送り合う。交流校の6年生の卒業式のビデオや、お互いの「留学生」が帰国した様子の写真を見る。
2. どの活動をよく覚えているかや、よく考えながらやったかを思い出す。
3. 海外の児童との交流に興味・関心を持って取り組み、相手に友達意識を持ってメッセージを伝えようとしたり、またこのような交流をやってみたいと思う。

2月～「平昌2018冬季オリンピックと東京2020マスコット投票」〈画像〉 体育・総合

1. 韓国や平昌、冬季オリンピックの競技について知り、いくつかの語を一緒に言うことができる。東京2020のマスコット候補の特徴を知り、自分の選択を言うことができる。(I like Mascot A the best. (Why?) Because they are cute! 等)
2. 平昌2018クイズの答えを考える。東京2020のどのマスコット候補がいいと思うか、理由を考えて選択しようとする。
3. 平昌2018を通して、韓国と冬季スポーツに興味・関心を持つ。東京2020マスコット投票の活動について、SNSで交流校に知らせる。

3月～「平昌2018冬季パラリンピックとオリンピック・パラリンピックの精神と価値を学ぼう」
(英・韓・日の3ヶ国語)〈作品〉 体育・道徳・図工

1. 冬季パラリンピック・クイズをしながら、競技について知ったり、オリンピックとパラリンピックの「価値」について学び、一緒に言ったり書いたりできる。

(My favorite Paralympic Value is 'Courage'. 等)

2. 実際に体を動かして、2つの大会競技の特徴の違いに気づく。価値の7つのことばから、理由を考えながら、自分が一番大事だと思うことばを選んだり、自分の手形の色画用紙にそのことばを書いた作品で表現したりする。
3. パラリンピアンの身体的特徴を理解し、共感しようとする。オリンピック・パラリンピックの精神と価値を選手への応援メッセージのポスター作品の創作を通して理解しようとする。作品を交流校に紹介する画像をSNSで送る。

(質問紙調査の結果) (最後の全体の振り返りと各回の詳細から)

* 4件法は、(^^) 4・3・2・1 (><)として表示

問1. 今回のイートン校との交流アクティビティは楽しかったですか。(情意)

- 毎回、参加児童全員がほぼ4か3を答えていた(94%)が、最も4の割合が多かったのは、6月の「校庭遊びを紹介しよう」(75%)、次いで5月の「交流を始めよう」、10月の「もったいないおばあさんと 'Mottainai' Huntingをしよう」(64%)であった。

問2. 今日の活動(～について)の内容が、わかりましたか。[知識](Content)

- 4(56%)と3(38%)がほとんどであり、全体的に4の方が多かった。さらに活動について「どんなことをよくおぼえていますか」という問いがある場合は、実際自分自身でおこなうタスク自体を挙げる記述が最も多く(78%)、次いでトピックについての詳細な記述がみられた(30%)。

問3. 今日の英語がわかりましたか。[技能](Communication) * 「理解」のみ

- 4(47%)と3(45%)で、大部分を占めたが、2(8%)は、毎回同じ児童であった。

問4. 各活動の内容について考えたり、考えながら作ったりしましたか。[思考力・判断力・表現力等](Cognition)

- 4と3で、ほとんどを占めたが(91%)、追加質問の「どのように考えたか」や、「一番よく考えた活動」は、10月の「もったいない」の分類についての記述が多かった。

問5. グループで協力したり、交流校の子どもたちや国のことなどにきょうみを持ったり、もっと知りたいと思いましたか。[学びに向かう力・人間性等](Community/Culture)

- 4と3でほとんどを占め(96%)、交流校の活動やメッセージに対する追加質問に具体的な記述が多く上がっていた。2(4%)は、協力が上手くできなかった児童であった。

問6. ほかに思ったことや、気がついたことがあったら書きましょう。(自由記述から抜粋)

- 活動内容・言語に関する感想(いろいろなアクティビティをもっとやりたい、英語をみんなで勉強できて楽しかった、きんちょうしたけれどもうまく言えた、あまりうまく言えなかった等)

(Content・Communication)

- 相手に対する気づき (いろいろなことをやって、がんばっているなどと思った) (Cognition)
- 交流国の文化や学校についての質問 (1日はどんな生活、何が流行っているか、どんな食べ物があるのか、どのような休みの過ごし方か等) (Community/Culture)
- お互いの「留学生」についての気持ち (オージーがかわいい、マーゴがかわいがってもらって良かった) (Community/Culture)
- 相手とのコミュニケーションに対する興味 (日本の文化や良いところを伝えたい、E校の子たちと話したい) (Community/Culture)

自分たちとの類似点、相違点に関する追加質問からの抜粋 (Cognition)

- 自分たちと似ている点: 遊びが好き、元気がある、笑顔、日本語の英語の両方を勉強している、おたがいのことばをおぼえるのが楽しいところ等。
- 自分たちと違う点: 好きな遊び、見かけ (髪の色や背が高い)、校庭がすごく広くて芝生、かならず外で帽子をかぶる (紫外線除け)、自分たちでそうじをしない、あまり変わらない、まだおたがいのことばを完ぺきにおぼえていないところ等。

英語を学んでいる感想からの抜粋 (Community/Culture)

「しょう来につながると思う」「世界の人とコミュニケーションを取れることがすごい!」「中1の勉強が楽になると思う」「日本とちがう文化や言葉など、色々なことを学べておもしろい」

Thank you message からの抜粋 (Community/Culture)

「オージーにはもっと日本のことを知ってほしかったなー。2020年の東京オリンピックにきてね〜。まってるよ!」「私はあまり英語が好きではなかったけれど、イートン校と交流したことで英語をしゃべったりきいたりすることが楽しくなりました」

IV-2-4 考察

IV.2.1で述べたこのプロジェクト全体の2つの「目的」に照らして、上記の結果を考察する。

- 1) 今回の特徴である2ヶ国語でのやり取りを含んだ多様なCLIL授業案を作成することにより、各活動における児童の反応や気づきにどのような傾向や特徴があるか。

これについて、おもに以下の3点を述べる。

- まず、前述の全10回の各活動内容とその目標3観点(4Cs)・交流方法・関連科目の記述から、各回でトピックや活動の種類異なる多様なCLIL授業案が作成・実施されたといってもよいだろう。また、都教委のオリンピック・パラリンピック教育の4つのテーマに照らし合わせても、「オリンピック・パラリンピックの精神」(5,7,12,3月)「スポーツ」(6,9,2月)「文化」(8,11月)「環境」(10月)と、全てのカテゴリーを取り上げていた。
- 児童の各トピックへの興味は、全体の結果からは「校庭遊びの紹介」をもっとも好んでおり、学校生活で自分たちが特に楽しんでいることを共有することの大切さが見て取れる。一方で、各個人の好みをより詳しく見てみると実にさまざまで、多様なトピックは、二五(2016)が

MI理論を通して強調するように、各個人の得意なことや興味に幅広く対応できるといえる。

- 2ヶ国語の使用に関する児童の反応や気づきは、類似点の記述で「おたがいのことばをおぼえるのが楽しい」と同じ立場での学びを共有する気持ちが芽生えていた。また、「まだおたがいのことばを完ぺきにおぼえていない」とあるように、相手の日本語の発音やイントネーションの違いに対する気づきの声が多く挙がり、すぐに真似をし始めていたが、逆にもっと自分たちの音声面の気づきがふえるよう働きかけるべきであった。

2) この国際協働学習プロジェクトを通して、日本の児童が同年代の外国の児童への他者意識を高める。

これについては、おもに以下の2点を述べる。

- 今回、単なる交流ということにとどまらず、「国際協働学習」といえるよう、だいたい毎月同じトピックに関して取り組み、その内容を共有し学び合う、というやり方を当初からとっていった。これについて、自分たちの活動の時は、そのトピックについてある程度よく学び、考えたり、表現したりしていたことが各Cの4と3の割合の高さから見て取れたが、相手の活動や発表、作品についての学びや感想はより少なかった。もっとそれを十分におこなうためには、月1回であることや、他の授業や行事で十分な時間が取れない等の時間的制約をもっと考慮した上で、協働的な学びとなるよう進めていく必要があるだろう。
- 結果から、Community/Cultureに関する記述の部分が他のCに比べて多い。これはやはり最初から海外の交流校の児童達とやり取りしていくという設定が、他者意識を持ち続ける大きな要素となっていたといえる。また、このプロジェクト独特の擬人化した「留学生」のぬいぐるみの存在も大きかった。しかし、最後は高学年らしく、相手の児童に向けて、交流や学びの共有に対するお礼と、「もう友だち」「また交流したい」ということばも出ており、これぐらいの期間で継続的におこなうことで、ある程度の他者意識の高まりは見られたといっただよいのではないだろうか。

V. まとめ

新学習指導要領により、3年生から外国語活動が始まり、高学年では外国語科という教科になり、文字の読み・書きが始まるため、英語嫌いの早期化、その結果、長期化が起こることが懸念される。が、この論考で示した実践のように、意義ある国際理解のテーマを内容として扱い、児童が言いたいと思う英語表現を選んで導入し、グループでの学び合い、外国の子どものとの交流がある英語授業は、より積極的に英語学習に向かう児童を育成する可能性を秘めていると考える。

新学習指導要領のキーワードは「主体的・対話的で深い学び」である。つまり、コミュニケーション活動に子どもが主体的にかかわりながら思考力を高め、その結果として理解や思考が深まることが期待されており、それは英語授業においても求められることとなる。

この論考で述べたように、国際理解教育としてオリンピック・パラリンピックをテーマにCLILで英語を学ぶことは、この方向性を目指す英語教育への一歩となるのではないだろうか。

また、グローバル社会における多文化共生のための異文化コミュニケーション力もますます必要と
なってくるであろう。特に日本では、世界中の人たちが集まる東京2020に向けて、その必要性は加速
化していくことと思われる。そして、この論考で紹介した国際協働学習プロジェクトの有効性もさら
に認知されていくと考えられる。筆者2名は、今後も「深い学び」に通じていくような国際協働学習
の多様な授業案や教材を開発し、小学校の外国語教育に貢献すべく実践を重ねていく所存である。

注

1. Globe International Teachers Circle. 主として1990年代に国際理解教育に基づく子どもの英語教育の教
材開発に取り組んだ教師のグループ。
2. 「国際理解, 国際協力及び国際平和のための教育並びに人権及び基本的自由についての教育に関する勧告」
1974年11月, 「第18回ユネスコ総会採択」より
3. 「中等学校における外国語教育に関する各国文部省に対する勧告第59号—1965年12月ユネスコ国際公
教育会議」より (下線は筆者による)
4. マイケル・バイラム 細川英雄監修 山田悦子・古村由美子訳(2015)『相互文化的能力を育む外国語教育
—グローバル時代の市民性形成をめざして—』大修館書店, p.90.
5. 文部科学省国際統括官付 日本ユネスコ国内委員会 (2016) 「ESD (持続可能な開発のための教育) 推進の
手引(初版)」, p.5.

参考文献

- ガードナー, H. (2003). 『多元的知能の世界—MI理論の活用と可能性—』日本文教出版.
- 桑原隆 (1992). 『ホールランゲージ』国土社.
- Globe International Teachers Circle (2000). 『英語で学ぼう 国際理解教育』, GITC.
- 公益財団法人 日本オリンピック委員会 (2014). 「JOCのすすめるオリンピック・ムーブメント」
<https://www.joc.or.jp/movement/data/movementbook.pdf>
- 公益財団法人 日本オリンピック委員会 (2017). 「オリンピック価値教育の基礎」
<https://www.joc.or.jp/olympism/ovep/pdf/ovep2017.pdf>
- 公益財団法人 日本障がい者スポーツ協会 日本パラリンピック委員会 (2012). 『国際パラリンピック委員会公
認教材 ImPOSSIBLE』
<https://education.tokyo2020.org/jp/teachers/texts/iampossible/>
- 坂本ひとみ・滝沢麻由美 (2016). 「福島とトルコの子どもを結ぶ英語環境プロジェクト—CLILによってWTC
を高める試み—」『東洋学園大学紀要』24: 163-180
- 笹島茂・山野有紀編著他 (2019 in press). 『学びをつなぐ小学校外国語教育のCLIL実践「知りたい」「伝え合
いたい」「考えたい」を育てる』三修社.
- 清水和久・直江学美・リチャード・ギャビン他 (2018). 「初等, 中等, 高等教育におけるグローバル人材育成
のための教育の手立て(4) 英語教育とICTの活用による国際協働学習を通して」『年報』38: 23-28 金沢星稜
大学総合研究所.
- 真珠まりこ (2005). 『Mottainai Grandma もったいないばあさん対訳版』講談社.
- 東京都教育委員会 (2016). 「オリンピック・パラリンピック教育」
<https://www.o.p.edu.metro.tokyo.jp/index>
(英語版) <https://www.o.p.edu.metro.tokyo.jp/en/>
- 東京都教育委員会 (2016). 『オリンピック・パラリンピック学習読本』

- 東京都教育委員会 (2016). 『Welcome to Tokyo 初級編・基礎編・発展編』
- 特定非営利活動法人グローバルプロジェクト推進機構ジェイアーン (2018). 「2017 国際協働学習 iEARN レポート」 http://www.jearn.jp/japan/iearn-report/ISSN24340049_2017.pdf
- 二五義博 (2016). 『8つの知能を生かした教科横断的な英語指導法』 溪水社.
- フィッシャー, S. ・ヒックス, D. (1991). 『ワールド・スタディーズ』 国際理解教育センター.
- 町田淳子・滝沢麻由美 (2018). 「2017年度 一般財団法人 日本児童教育振興財団助成研究 国際理解教育としてのオリンピック・パラリンピックをテーマにした小学校英語教育教材の開発 研究報告書」 一般財団法人 日本児童教育振興財団.
- 町田淳子・滝沢麻由美 (2019). 『英語で学ぼう オリンピック・パラリンピック—CLILによる国際理解教育として』 子どもの未来社.
- 文部科学省 (2017). 「新学習指導要領 (本文・解説・資料等)」 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1383986.htm
- 文部科学省 (2004). 「グローバル教育へ JEARN (ジェイアーン)& iEARN (アイアーン)」 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/026/shiryou/05041401/001.htm
- 山野有紀 (2013). 「小学校外国語活動における CLIL の実践とその展開—授業実践から見た可能性—」 『EIKEN BULLETIN』 25 : 94-126
- ローラント・ナウル (2016). 筑波大学オリンピック教育プラットフォーム・つくば国際アカデミー監訳 『Olympic Education オリンピック教育』 大修館書店.
- 渡部良典・池田真・和泉伸一 (2011). 『CLIL 第1巻 原理と方法』 上智大学出版.
- Bali, P., Kelly, K., & Clegg, J. (2015). *Putting CLIL into practice*. Oxford University Press.
- Byram, M. (1997). *Teaching and Assessing Intercultural Communicative Competence*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Coyle, D., Hood, P., & Marsh, D. (2010). *CLIL: Content and Language Integrated Learning*. Cambridge University Press.
- Gardner, H. (1983). *Frames of mind: The theory of multiple intelligences*. New York: Basic Books.
- International Education and Resource Network (iEARN) (2018). <https://iearn.org/>
- iEARN USA (2018). iEARN International Conference & Youth Summit 2018, VA, USA <https://iearn2018.org/>
- Machida, J. (2013). Helping Teachers Develop Thematic Teaching. Nakasendo English Conference 2013 poster presentation.
- The International Olympic Committee (2018). Olympic Values Education Program. <https://www.olympic.org/olympic-values-and-education-program>
- The International Paralympic Committee (2018). <https://www.paralympic.org/the-ipc>